九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アンティ・ベラム南部における奴隷制プランテイションの収益性について

服部, 哲郎

https://doi.org/10.15017/2331269

出版情報：史淵. 85, pp.75-107, 1961-05-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

アンティ・ベラム南部における奴隷制プランテイションの収益性について

服部哲郎

一、前　言
二、二つの批判例
三、資本利子の問題
四、奴隷の自然増殖と利潤
五、奴隷価格の騰貴と利潤
六、五〇年代における南部農業の一般的繁栄と労働市場
七、結　語

一

奴隷制プランテイションの収益性をめぐる論争は、それ自身すでに百数十年の歴史をもつといっても過言でない。その初期のいわゆるアンティ・ベラム（Ante-Bellum）において展開されたものは、奴隷制度そのものの存廃の論議が闘わされた過中であっただけに、当面すこぶる政治色の濃い問題として時代人の強い関心の的となったが、やがて奴隷制度の廃止とともに論争自体の歴史的興味も次第にうすれ去ったのは当然であった。しかるに最近数十年来、とりわけ三〇年代

以降、この問題は新なる装いの下にアメリカの歴史家達の注意を喚起するに至り、再びそれをめぐっての活潑な論争が展開されることとなった。

ところでこうした奴隷制プランテイションに関する収益性論争再燃の大きなきっかけの一つが、C・L・グレイによるU・P・フイリップス批判にあったことは大方の認めるところであろう。大まかにいってフイリップスまでの論争の焦点はプランテイション経済にとって奴隷労働制度と自由労働制度とでは、いずれがより有利であるかという比較論にあったといえよう。そしてどちらかといえば南部のプランターを含む奴隷制擁護論者たちの唱えた奴隷労働制度の経済的不利を主張する立場が優位を占めつつ、その後の歴史家たちの上に支配的な影響を及ぼしたのであった。しかしながらプランテイション経営に関する収益性の問題が奴隷労働制度対自由労働制度の論議とからみ合わされ、ないしはそれにすりかえられた形で提起されたことはもともとこの問題の解決を極めて厄介かつ困難ならしめるものであった。けだしこれら二つの労働制度を比較検討する為の資料はアンティ・ベラムの当時に於てさえ、殆んど存在せず、かりに南部の slave plantation と北部及び西部 の free labor farm とを比較するにしても、これら両地域の間には、その風土的条件に於て、また社会的、経済的条件において、あまりにも本質的な差異が大きすぎたのであり、またその困難さは奴隷解放前の南部と解放後のそれとを比べる場合にもおおむね同断であった。これに対してグレイ以後あらたに抬頭しきたった収益性論争はとりわけ奴隷制プランテイション経営自体の採算性の問題に集中されて来た観がある。

しからばグレイ以後における収益性論争再然の要因は何であったか。この点についてはわたくしは、おそらく今世紀の三十年代を契機として現われたアメリカ近代化過程に関するこの国の歴史家たちの関心の急激なたかまりと深いかかわりがあるものと考えている。ということは、この頃から南北戦争がアメリカ近代化の歴史過程のなかで、どのような意義をもち、またどういう役割を演じたかについての論議がとみに活潑化しており、それとの関連において、一体黒人奴隷制は南

北戦争という外因的な力の作用によって解体したのか、それともそのような一切の外的要因の作用がなくとも本来それ自身のもつ重味によって、おのずから崩れ去る必至の運命にあったのか、かりに若し後者の場合だとすれば、奴隷制度は南北戦争勃発の前夜において、少くともその内的矛盾を露呈しつつあったかあるいはすでに頻死の状態に陥っていた筈であるし、若し前者だとすれば、奴隷制度は当時に於てなお確固たる経済的基礎の上に立っていたに相違なく、それゆえにこそ之が打倒のためには南北戦争という強力な政治的力に訴えることが必要であったのではないか、などの問題提起が彼等によってなされた事実をさしているのである。わたくしが本稿において奴隷制プランテイションに関する収益性の問題を採り上げる所以も亦彼等の関心の存したところと無関係ではない。

二

L・Mハッカーはかってその著「資本主義の勝利」の中で、C・S・シドナーの提出したミシシッピーの典型的な大プランターの仮想例を引用して、アンティ・ベラムにおけるプランテイション経営に関する収益性の問題に論及したが、[1] われわれも亦その仮想例についての検討から問題を出発させたい。仮想例といっても、勿論それはもともと多数のプランテイション記録からえた平均値を基礎としてつくり上げた「収支報告」であるから、そこにあげられている数字が全くのでっち上げでないことはいうまでもない。それどころかこの仮想例は、内容の詳細かつ包括的な点でかなり高く評価されているものであり、ことにハッカー教授のごとき、これを以てプランテイション経営に関する「すばらしい解剖」とまで絶賛している程で、少くともアンティ・ベラム奴隷制プランテイションに関する収益性の分析には、無視しえない重要な資料の一つであらう。その内容を再録すると次のとおりである。

主たる収入源を棉花とする。黒人奴隷五〇人のうち三〇人が棉作労働に従事したものと見て、かりに一人当り五¾梱を生産するとすれば総計一五八梱となり、一ポンド一〇セントとして棉花の売上高は……六、三二〇・〇〇弗

次にこのプランテイションの経費であるが、五〇人の黒人奴隷一人当り六〇〇弗とすれば（但し五〇年代後期の価格はもっと高かった）総投資額は三〇、〇〇〇・〇〇弗となり、之に対する利子を年六分と計算すると、その利息は……一、八〇〇・〇〇弗

少くとも之に劣らない金額を事故、死亡、老衰などによる奴隷財産の減価償却分として加算するとその額が……一、八〇〇、〇〇弗

平均位の農業労働者一人当りの耕地面積を一二エーカーとすると、牧場、森林及び畑地が六〇〇エーカーあればよいわけだから、一エーカー当り一〇弗と見てその土地投資額に対する利子は年六分として……三六〇・〇〇弗

また土地は通常少くとも年間三%の割合で減価するとしてその減価償却費が……一八〇・〇〇弗

奴隷監督の年間雇傭費が少くとも……三〇〇・〇〇弗

ニュー・オールリンズその他から黒人用衣類、プランテイション用各種雑貨等の購入費が……一、〇〇〇・〇〇弗

以上の経費および利子負担額の総計……五、四四〇・〇〇弗

但しトウモロコシおよび豚肉（これはたいていのプランテイションでは充分に生産されなかった）の購入費のような各種の費用はこのうちに含まれていない。(2)

さてハッカーは以上の数字から引き出されるこのプランターの収益が僅かに八八〇弗、利潤率において二%にすぎない点に注目し、シドナーと共にアンティ・ベラム奴隷制プランテイション経営の収益度＝繁栄度について極めて悲観的、否定的な結論に導かれたのであった。

ところが、この同じ仮想例をその論著 "Was Plantation Slavery Profitable?" の中に引用して、同じくアンティ・ベラム奴隷制プランテイションの収益性問題を採り上げたT・P・ゴーヴァンは、ハッカーとは反対に右の「報告」内容を厳しく批判し、シドナーの結論を全面的に否定するに至っていることは興味深い。そこで以下彼によるシドナー批判の

内容を照介すると概ね次の四点に要約される。[3] まず第一は収入の内容評価に関する問題、とくに奴隷財産の価値の増大に伴う収入の内容評価に関するものである。彼によれば、奴隷は本来自然増殖によって、また厳密には熟練度や市場価格の上昇などの諸要因によっても、しばしばその価値を増大するものであり、従ってそれらの増収分については当然収入の一部として考慮さるべきものである。ことに大プランターの場合は、その殆んどが多かれ少なかれ若いニグロを飼育していたのであって、その結果彼の財産は特別の事故のない限り年々その価値を増加するのが普通であった。にも拘らずシドナーはかかる事実を数字の上で一切無視しており、しかも他方に於ては事故、死亡、老衰などによる奴隷財産の消耗面にのみ着目して、之を資本の償却分として経費に計上し、そのため全体としての収入が不当に過少評価される結果となっているのはいかにも不合理である。第二も同じく収入の評価にかかわる問題であるが、土地財産の減価償却についてシドナーは年三分という償却率を算出しているが、一体彼はどういう根拠に基いてかかる数字を設定したかが明確でない。しかもかりにその三%という数字を妥当な数字として認めるとすると、このプランテイションは三三年後には全く無価値な存在と化すべき勘定となろう。しかるにミシシッピーの土地は、このプランテイションをも含めて、今なお儼然として農園としての機能を果しつつあるのである。成程、凡ての作物は大地から何ものかを収奪するであろう。しかし同じ確かさで人間労働力が之に何ものかをプラスし、時にはその価値を増大しさえする事実も同時に忘れられてはならぬ。とすればただ土地のマイナス面のみに着眼して、何らの数字的根拠もなく之を取上げることは、これまた明らかに不当である。第三は資本に対する利子の評価に関するものである。まず資本に対する利子とは何か。シドナーは恐らく之をプランテイション企業運営のためのコストと考えているようであるが、之には、それとは全く反対にそれを事実上の利潤の一部と見る逆の考え方があることに注意しなければならぬ。なぜなら、実際問題として信用によって事業を始めたのではないアンティ・ベラムの多くの大プランターたちにとっては、この種の利子は決して経費ではなく、それどころかいつでも自由に消費しうる金

であったのだ。しかし資本に対するこの種の利子をかりに経費の一部として認めるとしても、シドナーがこの「報告」の中で何のことわりもなく設定している六%という数字の根拠には疑問がある。それはある時点における一般的収益率とも考えうるし、また借入金に対する一般的利子率とも認められ、さらにはまた最も安定した投資から生じる利子率とする見方もあり得る。併しそのいずれの場合にも、いかなる数字が果してそれに妥当するかを確定することは殆んど不可能に近い難事であろう。第四は、資本そのものの価値評価に関するものである。ゴーヴァンはまず「奴隷一人当り二弗の価格の下落はこの州における奴隷資本の総額に殆んど百万弗の減少をひきおこすことになるのだから、奴隷制の収益性は主として奴隷の価格に依存していた」というシドナーの証言の裏ずけによって、彼が資本の価値は特定の時点における市場価格によってきまるという基本的な考え方をもっていた点を明らかにした後に、彼の資本評価の仕方そのものに批判のメスを向けていう。資本評価の方法に関するそのような考え方は、奴隷主が販売目あての奴隷飼育業に従事している場合を除いて一体いかなる経済学者や経理士が之を受けつけうるというのか。実際にはそんな大プランターは殆んど存在しなかったのだ。この事実をシドナーは無視している。それだけではない。シドナーがいうように、もし奴隷価格が下落した結果がプランターの損失を意味するならば、論理的には奴隷価格の上昇は逆に少なくともプランターにとって利益とならねばならぬ筈ではないか。しかし事実奴隷の価格は一八五〇年代には殆んど年々上昇の一途を辿ったのである。然るにシドナーはその事実には全く眼を閉じて、その「報告」の中には何一つこの種の値上りによる収入増について記入するところがないのはどうしたことか。なお彼は六〇〇弗という奴隷資本の評価そのものに対しても疑念を抱き、それが一八五〇年代初期の市場価格を基礎としたことによって、奴隷資本が全体として実際よりもかなり高いものとなっており、従ってまた資本利子もそれに応じて高く見積られているわけで、その結果は当然利潤の過少評価を導き出している、というのである。かくてゴーヴァンは以上の批判ののち、結局このプランターの利潤は、かりにシドナーの資本評価額その他若干の数字をそ

のまま容認するとしても、少くとも五、〇二〇・〇〇弗、利潤率において優に七%を示すものであると主張する。

次にもう一つ、同じプランテイション記録の観察から全く相反した結論を導き出したアンティ・ベラムの二人の同時代人の例[4]を挙げておきたい。一人はアンティ・ベラム南部の著名な農業改良家、S・ロビンソンであるが、彼はサウス・カロライナの Society Hill にあったL・M・ウィリアムズのプランテイションに関するその報告書の中でこのプランテイションの収支状態を次の様に評価した。

一、資　産……一六〇、四〇二・〇〇弗

内訳

プランテイション総面積……四、二〇〇エーカー

（うち　耕　地　面　積……二、七〇〇エーカー）

プランテイションの土地総価格……六三、〇〇〇・〇〇弗

（エーカー当り一五弗とす）

奴　隷　所　有　数……二五四人

奴　隷　総　価　格……八八、九〇〇・〇〇弗

（一人当り三五〇弗とす）

プランテイション用施設、諸用具及び家畜を含む資産……八、五〇二・〇〇弗

二、収　入

棉　花　売　上　額……一九、八六八・一六弗

（棉花ポンド当り平均価格を六仙とす）

（但し、棉花ポンド当り七仙の場合は……二三、一七九・五二弗）

三　支　出……一七、八九四・四八弗

内訳
- 土地、奴隷及び家畜に対する投資利子（七％）……一一、一〇三・〇〇弗
- 土地、奴隷に対する税金、医療費、奴隷監督の賃銀（三人分）、施設及び諸用具の平均年間経費（減価見積相当額）、奴隷用衣食費、運賃、棉花販売費、其他……六、七九一・四八弗

四、利　潤……一、九七三・六八弗
（但し、棉花ポンド当り七仙の場合は……五、三八五・〇四弗）

之に対し当時サウス・カロライナ誌の主筆であった他の一人はロビンソンの右の報告内容をつぶさに反駁すると共に、同じプランテイションにつき次のような再評価を行った。

一、資　産……一四九、一五二・〇〇弗
二、収　入……二六、七四三・一六弗

内訳
- 綿花による収入（ポンド当り六仙として）……一九、八六八・一六弗
- 棉花以外（ベーコン其の他の食料品による収入）……二、四三〇・〇〇弗
- 奴隷の自然増殖による収入（増殖率五％として）……四、四四五・〇〇弗

三、経　費……六、七九一・四八弗
（但しロビンソンが計上した諸項目のうち土地、奴隷及び家畜に対する投資利子の分を除く）

四、利　潤……二〇、〇〇一・六八弗

さて彼のロビンソン批判の大要はこうである。先づ第一にロビンソンはプランテイションの総面積の中一、五〇〇エーカーが未耕地であるにも拘らず、この部分を耕地並みにエーカー当り一五弗の劃一的評価を行っているが之は不当である。もっともプランテイション経営には元来木材や牧草の供給源としての一定の用地が必要であろう。そこでその必要分としてかりに七五〇エーカーを見込むとしても残りの七五〇エーカーは少くともこのプランテイション経営には直接関係のない部分と見なすべきであろう。とすれば真の資産総額はロビンソンが評価した額よりも一一、二五〇弗だけ少ない額

でなくてはならぬ。第二にロビンソンは土地、奴隷及び家畜等の資本に対する利子の項目を経費の一部として算出しているが之も正当ではない。その理由はこれらの資本自体の価値の増大現象を一方的に無視すべきでないからである。しかも資本のうち、たとえば奴隷や家畜についてはその自然増殖が齎らす収入は七%という利子率をはるかに上廻るものであるし、また土地にしても土地改良によって生ずる価値の増大は当然収入の一部に計上さるべきである。かくて彼は以上の諸点を考慮して、このプランテイションの利潤をロビンソンのそれの実に十倍以上と見積り、その利潤率を一三%強と算定したのである。なお彼は最後に附言して、右の算定はロビンソンに従って棉花の販売単価をかりに六仙としたけれども、当時はチャールストンの棉花市場における実際の価格は平均八仙であったのであって、若しこの割で計算すればこのプランテイションの利潤額は優に二六、六一四・四〇弗となり、その利潤率は実に一八%の高きに達するであろうともいっているのである。

三

以上二つの批判例をあげて、アンテイ・ベラムの奴隷制プランテイションに関するいわゆる収益性論争が、個々の経営内容に即して具体的にどういう問題点を含んでいるかの一端を示したが、わたくしはここでそれらの一々をとり上げて、その是非の検証を試みようとするつもりはない。むしろそのいくつかにわたくし自身の論点の端緒を見出し乍ら、論旨をすすめてゆきたい。

まず第一に、以上の批判例の中で採り上げられている問題に資本利子に関する議論がある。それは資本に対する利子を経費の一部と見なすべきか否かというものであった。ロビンソンがこの種の利子を経費の一部と見做したことによって引き出した一、九七三・六八弗という利潤額と、之を収入の一部と見たてたサウス・カロライナの主筆が打ち出した二〇、〇〇

一・六八弗という利潤額との差額の大きさは、いかにもこの問題の重要さを端的に示しているようにおもわれる。しかし結論を先にいえば、ロビンソンの場合に関する限り、彼への批判は実は利潤という概念の捉え方の相違から生じた本来無用な議論であったとも考えられる。何故ならゴーヴァンによれば、ロビンソンは、利潤とは単なる「経営の賃銀」(wages of management) いいかえれば「経営者としての企業活動に対する報酬」(payment for the enterpreneur's actirity as manager) と考えていたのであり、従って「ロビンソンが若しも棉花が七仙で売れたら利潤 (profit) は五、三八五・〇四弗になるとしたとき、彼はただ Colonel Williams のプランテイション経営に対する労賃がその資本に対して三%の利得 (returns) に当るということを示したまでのことなのであった」[5]し、また一方ではロビンソンは「Williams のその年度を通じてえた所得総額 (total income) は一六、四八八・〇四弗であって、それはとりも直さず資本利子額の一一、一〇三弗と経営賃銀 (利潤) の五、三八五・〇四弗を加えたものであった」ともいっているのである。[6] このことはつまりプランター自身が資本利子をも利潤同様に実質的には之を自由に支配しえていた事実をロビンソンが認めていたことを意味するからである。

之に対してシドナーの場合はそうでなく、おそらく利潤を以て資本の使用に対する報酬と見る近代会計学に基いて、自己資本たると他人資本たるとを問わず一切の資本に対する利子は当然経費の一部として計上さるべきであるという考え方に立っているが、ただこのような考え方がアンティ・ベラム当時の南部に果してそのまま適用されえたか否かはおのずから別箇の問題でなくてはならぬ。この点について、K・M・スタムプは奴隷制度に関するその論著の中で「銘記されねばならぬことは Upper South の典型的な奴隷主はその奴隷を親から譲り受けたのであって、アンティ・ベラムの後期の高価格で購い入れたものではない」[7]との証言を与えていること、又ゴーヴァンもサウス・カロライナの主筆の利潤観によって代表される考え方こそ、アンティ・ベラム・サウスのごく普通の農民たちの間に広く受け容れられていたもので、要す

るに「全収入から資産の減損分を含む一切の経費を差引いたものが当時の農民たちの利潤概念であって」資本利子は経費の中には考慮されないのが一般であったと指摘していることが注意される。[8] ただその場合、このような考え方の理論的根拠をどう理解したらよいかという問題はなお残るわけであるが、その点についてわたくしはこう考えている。一体アンティ・ベラムの奴隷労働はいうまでもなく自由労働ではなかった。しかしその本質はすでに充分資本主義化された労働力として捉えうるものではなかったか。たとえば奴隷主プランターが奴隷に資本を投下する場合と、農園主が自由労働力を雇傭する場合とを比較するとき、前者は後者が幾年にも亘って労働商品を分割して買入れたものを単に一括して前払いしたものに過ぎない。つまり奴隷への投資＝奴隷商品の購買価格はその維持費とともにその奴隷一生分の労働（商品）に対する費用に外ならぬのだ。従ってそれは自由労働の雇傭主がその労働者に対して支払う賃銀と本質的にはことならないものである。更にいいかえれば、その種の費用＝価格は奴隷が少くともその最低限の生存を維持してゆく権利に対し、又彼等の時間と行動について充分な統制力（管理）を確保しえんために、奴隷主プランターがすすんで提供する費用＝価格に外ならないのである。もしこのような考え方が成り立ちうるならば、この種の投資から当然生ずべきであると奴隷主たちが期待した利子は、さきに見たようなアンティ・ベラムの特殊な社会条件の下に於ては、之を経費として計上する理論的余地は全くなくなる筈である。何故ならそれはもはや利潤から差引かるべき運営費ではありえないからである。（むろん資本が他人資本であり、奴隷が信用によって購われた場合はこの限りではない）いずれにしても、さきの条件の下では奴隷へ投下された自己資本に対する利子を、経費の一部としてその収入から控除することは、その利潤を不当に低く評価する結果を招くものといわねばならぬ。

四

第二に、財産としての奴隷の自然増殖と利潤との関係に関する問題をとりあげたい。シドナーを批判したゴーヴァンも、ロビンソンを批判したサウス・カロライナ誌の主筆も、ひとしく奴隷財産の増殖に伴う資産の増加分を当然収入の一部として計上すべきことを主張しているが、そのこと自体は経理上当然の作業であるとしても、果してそのことによって利潤にどれ程のプラスが齎らされるのであるか。一般に奴隷の自然増殖と利潤との関係はいかにとらえらるべきか。いうまでもなくこの点の解明は決して容易な問題ではない。たとえばあるプランテイションにおいて一人の女奴隷が数人の子供を産むという最も単純なケースを想定するとしても、そのことを中心として生起する雑多な経済的諸要因の一切を収支の計算において克明に捉えてゆくとなることは甚だ簡単でない。産前産後の静養期間における女奴隷の稼働時間の喪失＝生産力の減退、出産時に要する特別出費、生れた子供の年令に応じての養育費および年令に応じての生産力の問題等々考慮さるべき要因は極めて多岐にわたるのである。

これらの諸点につきA・A・コンラッドおよびJ・R・マイヤー両氏が最近提供した研究例は、当面の問題の分析に一つの有力な示唆を与えるものとして注目される。（次表二例参照）[9]

両氏は先ず、一つのプランテイションとそれに含まれる土地、奴隷、棉花等につき次のような仮想例を設定する。

1．このプランテイションの土地は第一級の男子農業奴隷の労働力により、一人当り年間三・七五梱の棉花を生産しうるものとする。（これはアンティ・ベラム・サウスにおける普通の肥沃度をあらわす。）

2．生産された棉花の農場渡し価格は七・五仙とする。

3．この研究例に登場する二人の第一級女子農業奴隷はその生涯を通じてそれぞれ一〇人（第一例）および五人（第二例）の子供を生

むものとする。なお出産は凡て安全で規則的に二年毎に行われるものとする。

4．右女奴隷の生産力は第一級男子農業奴隷の三分の一乃至三分の二とする。

5．女奴隷の出産前後の静養によって失われる農業労働時間は三ケ月とする。

6．出生した子供の可働年令は六才とし、それから男児は九才まで、女子は十三才までの間にそれぞれ大人（奴隷）一人分の維持費相当額（二十弗）を生産するものとする。

（なお左表において右の生産額は男児については六才―九才の間に毎年五弗引上げ、女児については六才―一三才の間に毎年二弗五〇仙増額することによって表わされる）

7．男女児の生産力は十八才に至るまで直線状に上昇しつづけるものとし、男児の場合は九才―一八才の間、毎年一〇弗、女子は一三才―一八才の間毎年五弗上昇するものとする。子供奴隷は一八才で一人前となり、その年に売りに出されるものとする。

8．その時の売価は八七五弗（但しこの価格は第一級男子農業奴隷の平均価格九二五弗と第一級女子農業奴隷の平均価格との中間値を以ってあてたもの）

9．安産の場合の分娩費は五〇弗とする。

10．子供奴隷一人当りの年間維持費は一才―六才の間は年間一〇弗、七才―一二才の間は一五弗、一三才以上については成人奴隷と同様二〇弗とする。

11．出産による奴隷の稼働時間の喪失による損失分は隔年毎に一六弗の割で本人の年間農業収益額から差引く。

12．本プランテイションの奴隷一人当りの投下資本額は一、二〇〇弗―一、三〇〇弗とする（但しこの数字はアンティ・ベラム・サウスにおける中級程度のプランテイションのそれによる）

第一例　第一級の女子農業奴隷が一〇人の子供を生んだ場合の年度別収益表

購入日から起算した使役年数	本人による農業収益	子供による農業収益	子供の販売による収益	本人の維持費	子供の維持費	純益
一	五六弗			二〇弗	弗	三六弗
二	四〇			二〇	五〇	(−)三〇
三	五六			二〇	一〇	二六
四	四〇			二〇	六〇	(−)四〇
五	五六			二〇	二〇	一六
六	四〇			二〇	七〇	(−)五〇
七	五六			二〇	三〇	六
八	四〇	三・七五		二〇	八〇	(−)五六・二五
九	五六	七・五〇		二〇	四五	(−)一・五〇
一〇	四〇	一五・〇〇		二〇	九五	(−)五〇・〇〇
一一	五六	二二・五〇		二〇	六〇	(−)一・五〇
一二	四〇	三七・五〇		二〇	一一〇	(−)五二・五〇
一三	五六	五二・五〇		二〇	七五	一三・五〇
一四	四〇	七五・〇〇		二〇	一三〇	(−)三五・〇〇
一五	五六	九七・五〇		二〇	九五	四七・五〇
一六	四〇	一二七・五〇		二〇	一五〇	(−)二・五〇
一七	五六	一五七・五〇		二〇	一一五	七八・五〇

一八	四〇	一九五・〇〇		二〇	一六五	五五・〇〇
一九	五六	二三二・五〇		二〇	一三〇	一三四・三〇
二〇	四〇	一九五・〇〇	八七五	二〇	一七〇	九二〇・〇〇
二一	五六	二三二・五〇		二〇	一三〇	一三八・五〇
二二	五六	一九五・〇〇	八七五	二〇	一二〇	九八六・〇〇
二三	五六	二三二・五〇		二〇	一二〇	一四八・五〇
二四	五六	一九五・〇〇	八七五	二〇	一一〇	九九六・〇〇
二五	五六	二三二・五〇		二〇	一一〇	一五八・〇〇
二六	五六	一九五・〇〇	八七五	二〇	一〇〇	一、〇〇六・〇〇
二七	五六	二三二・五〇		二〇	一〇〇	一六八・〇〇
二八	五六	一八七・五〇	八七五	二〇	九〇	一、〇〇八・五〇
二九	五六	二二五・〇〇		二〇	九〇	一七一・〇〇
三〇	五六	一八〇・〇〇	八七五	二〇	八〇	一、〇一一・〇〇
三一		二一〇・〇〇			八〇	一三〇・〇〇
三二		一五七・五〇	八七五		六〇	九七二・五〇
三三		一八〇・〇〇			六〇	一二〇・〇〇
三四		一二〇・〇〇	八七五		四〇	九五五・〇〇
三五		一三五・〇〇			四〇	九五・〇〇

三六		六七・五〇	八七五	二〇	九二二・〇〇
三七		七五・〇〇		二〇	五五・〇〇
三八			八七五		八七五・〇〇

第二例　第一級の女子農業奴隷が五人の子供を生んだ場合の年度別収益表

購入日から起算した使役年数	本人による農業収益	子供による農業収益	子供の販売による収益	本人の維持費	子供の維持費	純益
一	五六弗	弗	弗	二〇弗	弗	三六・〇〇弗
二	四〇			二〇	五〇	(一)三〇
三	五六			二〇	一〇	二六・〇〇
四	四〇			二〇	六〇	(一)四〇
五	五六			二〇	二〇	一六
六	四〇			二〇	七〇	(一)五〇
七	五六			二〇	三〇	六
八	四〇	三・七五		二〇	八〇	(一)五六・二五
九	五六	七・五〇		二〇	四五	(一)一・五〇
一〇	四〇	一五・〇〇		二〇	九五	(一)五〇・〇〇
一一	五六	二二・五〇		二〇	六〇	(一)一・五〇
一二	五六	三七・五〇		二〇	六〇	一三・五〇

一三	五六	五二・五〇		二〇	六五	二三・五〇
一四	五六	七五・〇〇		二〇	六五	四六・〇〇
一五	五六	九七・三〇		二〇	七五	五八・五〇
一六	五六	一二七・五〇		二〇	七五	八八・五〇
一七	五六	一五七・五〇		二〇	八五	一〇八・五〇
一八	五六	一九一・二五		二〇	八五	一四二・二五
一九	五六	二二五・〇〇		二〇	九〇	一七一・〇〇
二〇	五六	一八〇・〇〇	八七五	二〇	七五	一、〇一六・〇〇
二一	五六	二一〇・〇〇		二〇	七五	一七一・〇〇
二二	五六	一五七・五〇	八七五	二〇	六〇	一、〇〇八・五〇
二三	五六	一八〇・〇〇		二〇	六〇	一五六・〇〇
二四	五六	一二〇・〇〇	八七五	二〇	四〇	九九一・〇〇
二五	五六	一三五・〇〇		二〇	四〇	一三一・〇〇
二六	五六	六七・五〇	八七五	二〇	二〇	九五八・五〇
二七	五六	七五・〇〇		二〇	二〇	九一・〇〇
二八	五六		八七五	二〇		九一一・〇〇
二九	五六			二〇		三六・〇〇
三〇	五六			二〇		三六・〇〇

両氏は右の仮想例から八・一％（第一例）および七・一％（第二例）という利潤率を算出しているが、この数字は同じく両氏によって別途に算出されたアンティ・ベラムにおける中級程度のプランテイションの第一級男子農業奴隷の生み出す収益率四・五％―六・五％に比べるとかなりの高率を示しており、このことはプランテイション内部に於ける奴隷の自然増殖が経理上決して無視しえない大きさの利潤をその経営体にプラスしていた事実を物語るものであろう。

五

第三は奴隷価格と利潤との関係の問題である。ゴーヴァンはシドナーが一八五〇年代を通じて奴隷価格が年々上昇の一途を辿ったにも拘らず、この種の値上りを収支計算の上で全く無視しているために利潤を不当に低く評価する結果に陥った点を責めているが、ここでは奴隷価格の騰貴と利潤との関係を、それとはやや異った視点から考察することにしたい。

U・B・フィリップスはかってアンティ・ベラムにおける過剰投資と奴隷価格の法外な吊り上げとの関係を論じてこう述べている。「棉花価格の下落はある程度、栽培、繰綿および市場の改良によるコスト安に基くものであるし、また奴隷価格の上昇もある程度までニグロ労働能率の向上、プランテイション労働管理の改善および貨幣価値の低下に依るといえる。併し十倍乃至十二倍という途方もない奴隷価格の高騰は（奴隷の価格が棉花で見積られた当時としては）棉花の販売や奴隷の購買をめぐってのプランター間の激しい競争と結びつけて考えるのでなくてはとても説明出来ることではない。いいかえれば、アメリカの奴隷制度に見られるように資本と労働とが結合されている場合には、そこに奴隷価格の過大評価、奴隷労働への過剰投資、財政の均衡喪失、そしてついには完全な破産の危機へ至る抗し難い傾向があったのである」[10]と。然らば一体何故プランターたちはこのような資本競争に追いこまれたのであるか。彼によればそれは「ある限度までは

プランティションが大きい程それだけ無駄が省けた」からであり、かくて、奴隷制度は奴隷労働への過大投資と奴隷価格の過大評価との悪循環を通して南部プランターの富を無限に吸い上げたのであった。[11]

しかし果してアンティ・ベラムの南部人たちは、そのような奴隷価格の無限の投機的膨張の犠牲者であったろうか。フィリップスによると十九世紀の初頭から南北戦争の前夜に至る長期間における奴隷価格と棉花価格とを検べて見るのに、そのうち若干の短期間については両者はほぼ平行して上下しているが、その全期間については奴隷価格の方が極端な上昇線を描いているのに対し、棉花のそれは明らかに下降線を示しているのである。すなわち「一八〇〇年には第一級の農場奴隷の価格は繰綿約一、四〇〇ポンド相当の額であったが、一八〇九年には約三、〇〇〇ポンド、一八二六年には約五、四〇〇ポンド、一八三七年には約一〇、〇〇〇ポンド、一八四五年には約一二、〇〇〇ポンド、一八六〇年には約一五、〇〇〇ポンド乃至一八、〇〇〇ポンドの量にそれぞれ相当する金額であった。奴隷の仕事量でいうと、一八〇〇年第一級の黒人奴隷は一八六〇年における同クラスの奴隷と殆んど同程度であった。併しこの数字で見たところでは同じ六〇年間に奴隷の価格は棉花で見積って、ほぼ一〇〇〇%乃至一二〇〇%の増となっている。[12]」つまり内戦までのほぼ半世紀以上を通じて奴隷労働力の実質も棉花の価格も殆ど大した変化がないのに、奴隷価格だけは優に一〇倍乃至一二倍にもはね上っているわけで、そこに彼はアンティ・ベラム・プランティションにおける奴隷投資のはてしもなく絶望的な傾向を見出したのであった。

ところで、A・H・コンラッドおよびJ・H・マイヤーの両氏はまさにこの問題をとり上げて次のような反論を行っている。まず彼等によって示された次表に注目しよう。

一八〇二年―一八六〇年における棉花生産価格と奴隷人口（ニュー・オールリンズ市場価格による）

年度	棉花生産量（千ポンド）	ポンド当り平均棉花価格（仙）	奴隷数（一〇才—五四才）	奴隷一人当り生産棉花価格（弗）	第一級農場奴隷価格（弗）
一八〇二	五五、〇〇〇	〇・一四七	五五〇、七〇八	一四・六八	六〇〇
一八〇三	六〇、〇〇〇	・一五〇	五六八、九三二	一五・八二	六〇〇
一八〇四	六五、〇〇〇	・一九六	五八七、一五七	二一・七〇	六〇〇
一八〇五	七〇、〇〇〇	・二三三	六〇六、三八一	二六・九四	六〇〇
一八〇六	八〇、〇〇〇	・二一八	六二三、六〇六	二七・九七	六〇〇
一八〇七	八〇、〇〇〇	・一六四	六四一、八三一	二〇・四四	六〇〇
一八〇八	七五、〇〇〇	・一三六	六六〇、〇五五	一五・四五	六四〇
一八〇九	八二、〇〇〇	・一三六	六七八、二八〇	一六・四四	七八〇
一八一〇	八五、〇〇〇	・一四七	六九六、五〇五	一七・九四	九〇〇
一八一一	八〇、〇〇〇	・〇八九	七一七、三七六	九・九三	八六〇
一八一三	七五、〇〇〇	・一五五	七五九、一一八	一五・三一	六〇〇
一八一四	七〇、〇〇〇	・一六九	七七九、九八九	一五・一七	六五〇
一八一五	一〇〇、〇〇〇	・二七三	八〇〇、八六〇	三四・〇九	七六五
一八一六	一二四、〇〇〇	・二五四	八二一、七三一	三八・三三	八八〇
一八一七	一三〇、〇〇〇	・二九八	八四二、六〇二	四五・九八	一、〇〇〇
一八一八	一二五、〇〇〇	・二一五	八六三、四七三	三一・一二	一、〇五〇
一八一九	一六七、〇〇〇	・一四三	八八四、三四四	二七・〇〇	一、一〇〇

一八二〇	一六〇、〇〇〇	・一五二	九〇五、二一五	二六・八八	九七〇
一八二一	一八〇、〇〇〇	・一七四	九三三、五一七	三三・五五	八一〇
一八二二	二一〇、〇〇〇	・一一五	九六一、八一八	二五・一一	七〇〇
一八二三	一八五、〇〇〇	・一四五	九九〇、一二〇	二七・〇四	六七〇
一八二四	二一五、〇〇〇	・一七九	一、〇一八、四二一	三七・九九	七〇〇
一八二五	二五五、〇〇〇	・一一九	一、〇四六、七二三	二八・九九	八〇〇
一八二六	三五〇、〇〇〇	・〇九三	一、〇七五、〇二四	三〇・二八	八四〇
一八二七	三一六、九〇〇	・〇九七	一、一〇三、三二六	二七・八六	七七〇
一八二八	二四一、三九九	・〇九八	一、一三一、六二七	二〇・九一	七七〇
一八二九	二九六、八一二	・〇八九	一、一五九、九二九	二二・七七	七七〇
一八三〇	三三一、一五〇	・〇八四	一、二〇八、〇三四	二三・〇三	八一〇
一八三一	三五四、二四七	・〇九〇	一、二四七、四八九	二五・五六	八六〇
一八三二	三五五、四九二	・一〇〇	一、二七五、〇六一	二七・八八	九〇〇
一八三三	三七四、六五三	・一一二	一、三〇二、六三三	三二・二一	九六〇
一八三四	四三七、五五八	・一五五	一、三三〇、二〇六	五〇・九九	一、〇〇〇
一八三五	四六〇、三三八	・一五二	一、三五七、七七八	五一・五三	一、一五〇
一八三六	五〇七、五五〇	・一三三	一、三八五、三五〇	四六・七九	一、二五〇
一八三七	五三九、六六九	・〇九〇	一、四一二、九二三	三四・三八	一、三〇〇

一八三八	六八二、七六七	・一二四	一、四四〇、四九五	五八・七七	一、二二〇
一八三九	五〇一、七〇八	・〇七九	一、四六八、〇六七	二七・〇〇	一、二四〇
一八四〇	八三四、一一一	・〇九一	一、五〇七、七七九	五〇・三四	一、〇二〇
一八四一	六四四、一七二	・〇七八	一、五六八、〇二二	三二・〇四	七八〇
一八四二	六六八、三七九	・〇五七	一、六一一、二六九	二三・六五	七五〇
一八四三	九七二、九六〇	・〇七五	一、六五四、五一六	四四・一一	七〇〇
一八四四	八三六、五二九	・〇五五	一、六九七、七六二	二七・一〇	七〇〇
一八四五	九九三、七一九	・〇六八	一、七四一、〇〇九	三八・八一	七〇〇
一八四六	八六三、三二一	・〇九九	一、七八四、二五六	四七・九〇	七五〇
一八四七	七六六、五九九	・〇七〇	一、八二七、五〇三	二九・三六	八五〇
一八四八	一、〇一七、三九一	・〇五八	一、八七〇、七五〇	三一・五四	九五〇
一八四九	一、二四九、九八五	・一〇八	一、九一三、九九六	七〇・五三	一、〇三〇
一八五〇	一、〇〇一、一六五	・一一七	一、九七九、〇五九	五九・一九	一、一〇〇
一八五一	一、〇二一、〇四八	・〇七四	二、〇三四、四八二	三七・一四	一、一五〇
一八五二	一、三三八、〇六一	・〇九一	二、〇八〇、五五四	五八・五三	一、二〇〇
一八五三	一、四九六、三〇二	・〇八八	二、一二六、六二六	六一・九二	一、二五〇
一八五四	一、三二二、二四一	・〇八四	二、一七二、六九八	五一・一二	一、三一〇
一八五五	一、二九四、四六三	・〇九一	二、二一八、七七〇	五三・〇九	一、三五〇

一八五六	一、五三五、三三四	・一二四	二、二六四、八四三	八四・〇六	一、四二〇
一八五七	一、三七三、六一九	・一一二	二、三一〇、九一五	六六・五七	一、四九〇
一八五八	一、四三九、七四四	・一一五	二、三五六、九八八	七〇・二五	一、五八〇
一八五九	一、七九六、四五五	・一〇八	二、四〇三、〇六〇	八〇・七四	一、六九〇
一八六〇	二、二四一、〇五六	〇・一一一	二、四六〇、六四八	一〇一・〇九	一、八〇〇

之によると全統計期間を通じて棉花の価格は十九世紀の初頭の時期が平均して著しく高いのに対して、奴隷の価格はこの時期に於て最も低くなっている。これはいうまでもなく世紀の転換期を中心としてアメリカ棉花に対するイギリス市場の需要が急速に高まりつつあった中で、他方アフリカの奴隷貿易は一八〇七年の貿易禁止期を目捷に控えて、殆んど無放図な奴隷輸入をおこないつつあった当時のこの国の経済情勢を端的に反映したものであろう。それはともかく、ここで問題なのはフィリップスがあたかもこの時期にその分析のための年代上の始期を選んでいるということである。けだしこのことによって彼は奴隷価格の上昇に比べて、棉花価格の著しい下落を不当に誇張する結果に陥らざるをえなかったと考えられるからである。

しかし一層注意すべきことは、一八四三年のデフレーション以降南北戦争の前夜にいたる、より短い、しかもわれわれの当面する問題の分析には、少くともより直接的でかつ重要な関係を持つと認められる時期をとり上げて見ると、奴隷価格はその間に約一・五倍しか上っていないのに、一人当りの棉花生産価額は一八四二年における低点から優に三倍以上の上昇を示しているということである。そしてこのことの意義は極めて重要である。すなわちそれはその間に棉花価格が約二倍になっている点を考慮に入れてもなお、奴隷価格の上昇が同時に生産性の増大を伴っていたということで、それ自体決して単なる投機マニア的な価格の吊り上げではなかったということである。いいかえれば「それは比較的肥沃な地域に

おける生産の集中、アメリカ生れの奴隷たちの割合に高い能率、引き下げられた輸送費、および十九世紀四十年代以降に見られる棉花の高い生産性の発展に基く奴隷一人当りの棉花生産額の増大を、しっかりと踏まえた上でのマニアであった」のである。この点についてはK・M・スタンプもほぼ同様な意見をのべている。すなわち彼は「ニグロ熱が純収益に比べて過度な奴隷労働への投資を齎らした限りにおいて、かかる奴隷価格の膨張は一時的なものであり、結局は収縮が起ると見るのが正当である」と述べたあと、「こうした価格騰貴は、併し乍ら、必ずしも全く投機だけから起った結果ではなかった。それ以外にも例えば五〇年代の繁栄、南部のステープルの概ね結構な価格、ヴァージニアにおける農業の復興および長期に亘る労働力の不足を反映したものであり、さらには能率の増進や奴隷労働力の生産性の向上の結果でもあり、そして最後に幸運にめぐまれた西南部の景気のいい経営者たちの手腕のお蔭でもあったのだ」と論じている。[15] なお、いま一つ右表について注意される著しい点は、アンティ・ベラムを通じての奴隷価格の上昇傾向が、同じ時期における奴隷人口増加の一般的趨勢を背景として現われているということである。そしてこのことも亦、むしろ奴隷制プランテイションにおける収益性＝繁栄度の一つの「強い証拠」であるとコンラッド、マイヤー両氏は強調する。[16]

之を要するにアンティ・ベラムにおける奴隷価格の高騰現象は、当時の南部を席捲した投機熱と全く無関係であったとはいえないにしても、少くともこれまで一般に考えられて来た程、奴隷制プランテイション経済に専ら破壊的、否定的にのみ作用したのでない点は之を認むべきであろう。

六

さて、以上奴隷価格の高騰と五〇年代の繁栄との関係についてふれたが、実はこの五〇年代における南部農業の一般的繁栄については、それが収益性問題の解明に極めて重大な意味をもつと考えられるにも拘らず、これまで、とくに収益性

を否認する立場の学者たちによって、あまりにも等閑視され過ぎてきた観がふかい。ゴーヴァンもこの点につき「これらの歴史家たちの中には、その研究成果から認めうる限りでは、一八五〇年および一八六〇年のセンサスにおけるかなり入念な経済統計を使用しているものは一人もいない」[17]と非難しているが、少くとも彼等がプランテイション経営からえられる利潤についての彼等なりの低い収益しか認めないとするならば、その低い評価と、一八五〇年―一八六〇年の間における南部の富の大きな増加に関して記されたセンサスその他の統計書に現われた圧倒的な趨勢との間の矛盾を、せめて調停しようとする何らかの試みがなされて然るべきではあるまいか。ゴーヴァンはミズーリとデラウェアを除く一三の奴隷州を一括して、センサスその他の諸統計を基礎として、南部農業の繁栄度に関する次のような数字を与えている。[18]

項目＼年度	一八五〇	一八六〇
農場数	五〇八、六八〇	六六五、四一七
耕地総面積（エーカー）	五一、四五一、〇四〇	六七、四七八、六二九
農場当り平均耕地面積（エーカー）	一〇一・一五	一〇一・四一
未耕地総面積（エーカー）	一一八、六一二、三三八	一五六、九九六、五四九
一農場当り平均未耕地（エーカー）	二三三・三二	二三三・九四
農場平均規模（エーカー）	三三四・四七	三三七・三五
農場総価額（弗）	一、〇三五、五四四、〇七五・〇〇	二、二八八、一七九、一二五・〇〇
農場平均価額（弗）	二、〇三五・七五	三、四三八・七一

不動産並動産総価額（弗）	二、八〇九、八七五、四六二・〇〇
白人及び自由黒人一人当り不動産並に動産価額	四九〇・四九
奴隷所有者総数	三二六、〇四五
奴隷総数	三、一一〇、六五二
奴隷主一人当り平均所有奴隷数	九・五四

六、二四五、一二九、一六三・〇〇	
八七八・〇八	
三五八、七二八	
三、八三三、七八二	
一〇・六九	

これによると、耕地面積においては約三割、奴隷数においても約二割の増を示しており、かくて財産総額では実に二倍以上の増加となっている。むろんその間の物価の値上りも考慮されねばならぬであろうが、それを計算に入れても、南部農業が実質的な繁栄に向っていた事実は否定できないであろう。なお、この点についてはH・ウィーヴァーも亦、地域的にははるかに限度された範囲に関してではあるけれども、アンティ・ベラムにおける西南部のいわば代表的な農業州であるミシシッピーのめざましい農業的発展について、次の様な統計を与えている。(19)

郡別		奴隷所有者	奴隷数	耕地	未耕地	農場価格
アダムス	A	四二	三、四六二	二九、八四三	二九、〇五五	七九五、五七五
	B	八	…	二、八五〇	四、七〇〇	七五、九五〇
ボリヴァー	A	二一	六七六	四、九五六	一〇、七五一	二六六、三九〇
	B	二	…	七〇	二三〇	七、八〇〇

ハリソン	A	一一	六九	一六三	三四二	二、一五八	一、四四〇	三、一六一	一八、三五〇	四三、一三〇	ヒンヅ	B	九	…	六七	四九五	一、三六〇	一、二六五	一、一四三	六、八五〇	三九、六七〇	六六〇、七六〇	イサクェナ	B	一	…	二六	五〇	二五〇	二八〇	三〇三	三、〇〇〇	二〇、〇〇〇	ジェファソン	B	一七	…	三四	二、三五八	三、八九八	五、二六六	五、二七五	五〇、八三二	九六、一四〇
	B	一〇	…	二	一八三	一三五	一四〇	一、七八三	二、四〇〇	一、八五〇		B	九	…	六七	四九五	一、三六〇	一、二六五	一、一四三	六、八五〇	三九、四〇〇	二、七三、一四〇		B	一	…	二六	五〇	二五〇	二八〇	三〇三	三、〇〇〇	二〇、〇〇〇		B	一七	…	三四	二、一九二	一、四四八	二、一八〇	二、三八六	二、二六〇	一三、六一七		B	七五	…	二四	一、九一二	三、一〇四	二、一八〇	二、三八六	二、三六〇	二〇、五五六		B	一五	…	四八二	一、〇七七	一、〇六三	一、九七〇	六、一五三	一一、三三五	七、〇〇〇		B	八	…	六七	二、四七五	九、七七二	一九、三七四	二三、四八六	二七、〇八八	三九、四〇〇	二、七三、一四〇		B	一七	…	三六	二、三五八	九、七七二	一九、三七四	二三、四八六	二七、〇八八	三九、四〇〇	二、七三、一四〇		B	一	…	二六	五〇	二五〇	二八〇	三〇三	三、〇〇〇	二〇、〇〇〇		A	八六	三、七六〇	五、〇四四	二九、一六七	四八、八二〇	四五、九〇五	六三、五三三	六八四、六三一	一、三三五、七八九		A	八六	三、七六〇	五、〇四四	二九、一六七	四八、八二〇	四五、九〇五	六三、五三三	六八四、六三一	一、三三五、七八九		A	二五	一二九	一四五	一、一四八	二、一八〇	二、三八六	一三、六一七	七、〇〇〇	五三、〇八〇		A	二五	一二九	一四五	一、一四八	二、一八〇	二、三八六	一三、六一七	七、〇〇〇	五三、〇八〇		A	三〇	六三一	九三〇	七、五七五	一〇、七二五	七、〇五六	八、五六一	九六、九四〇	四三、一七〇		A	三六	六五五	一、〇二九	七、五六三	一三、六一九	一三、八五四	一七、三四一	一三六、四三五	五〇八、五〇〇		A	一七	一四二	一八二	一、五〇三	二、一一〇	二、六一一	一〇、四五二	一六、〇二五	六四、七五〇		A	一五	九八	一六七	一、三三五	二、一三五	三、九〇七	六、五九一	一八、二〇五	一二三、〇〇〇		B	三四	…	五二	一、四二七	二、五三〇	七、〇二四	九、二三三	三三、六五〇	五一、九五〇		B	五	…	一四	四八二	一、〇七七	一、〇六三	一、九七〇	六、一五三	二四、一七〇		B	五	…	一	一八八	二七〇	一五四	一五五	二、〇四五	五、五八〇		B	一二	…	二二	三八八	四九一	七五〇	二、〇七六	三、〇八五	一八、九九〇		B	七五	…	二四	一、九一二	三、一〇四	二、三六〇	二〇、五五六	一一、三三五	七一、〇四五		B	三〇	六三一	九三〇	七、五七五	一〇、七二五	七、〇五六	八、五六一	九六、九四〇	四三、一七〇		A	一五	九八	一六七	一、三三五	二、一三五	三、九〇七	六、五九一	一八、二〇五	一二三、〇〇〇		A	一七	一四二	一八二	一、五〇三	二、一一〇	二、六一一	一〇、四五二	一六、〇二五	六四、七五〇		A	三六	六五五	一、〇二九	七、五六三	一三、六一九	一三、八五四	一七、三四一	一三六、四三五	五〇八、五〇〇		B	五	…	一	一八八	二七〇	一五四	一五五	二、〇四五	五、五八〇		B	一二	…	二二	三八八	四九一	七五〇	二、〇七六	三、〇八五	一八、九九〇		B	三四	…	五二	一、四二七	二、五三〇	七、〇二四	九、二三三	三三、六五〇	五一、九五〇
ロウンズ																													
ジョウンズ																													
マーシャル																													
スコット																													
ティショミンゴ																													

ウエイン	A	二二	三九六	二四八	三、二五五	八、二七	五、七九二	一五、二七七	三四、三九五	一三、四〇〇
	B	一〇	…	三	三四〇	三四七	五四三	五九五	二、一三〇	六、五〇〇
総計	A	三六一	二三、三四	一七、二三五	一〇六、七三〇	一六八、六五二	二六六、三八一	二六〇、五八二	二、六〇七、九〇二	八、一二九、〇七九
	B	一九八	…	九五三	一〇、七三三	一六、七七	二四、〇〇五	四七、一五三	一九四、二三〇	四二六、四九五

（但し、右の諸郡の撰択は土壌別サンプリング方式による）

これらの数字はミシシッピー農業の繁栄が奴隷主プランターだけでなく、非奴隷主農民の経営についてもほぼ同程度に見られた事実を示しているが、ここでは特に奴隷主プランターの場合に限って眺めると、先ず奴隷所有者の数はアンティ・ベラム最後の十年間に実に三倍半近くも殖えている。すなわち一八五〇年当時には奴隷を所有していなかった一九八人の農民のうち、その三割強を占める六一人が十年後には新に九五七人の奴隷の所有主となっており、一方一八五〇年当時から奴隷所有者であったものも、全体的に見て三割近くが手持ちの奴隷数をふやしている。又土地について見ても、未耕地において約三割七分、耕地において約三割六分、さらに農場総価額においては実に三倍強の増大を示しているのである。もちろんこれらの統計は、アンティ・ベラム・サウスの奴隷制プランテイションが、その最後の一〇年間に於て収益性を示した事実を直接立証しているわけではない。しかしそれは当時のプランターたちが利潤を産み出しつつあったことを否認する人々に向って、少くとも大きな反証の重荷を負わしめるに足る有力な資料を提示しているものといわねばなるまい。

なお最後に右の南部の繁栄の問題と直接関連する重要問題として、労働力補給の問題につき一言しておきたい。いうまでもなく労働力の円滑な補給こそ南部繁栄の基礎であったからである。古代ローマの奴隷制は辺境における奴隷の給源に支えられ、カリビア海域砂糖諸島のそれはアフリカ貿易に依存していた。そしてそれらからの補給が絶たれた時、それぞ

れの奴隷制度は歴史からその姿を消したといわれている。然らば既に一八〇七年以降奴隷の輸入を禁止されていたアンティ・ベラム・サウスの奴隷制プランテイションの繁栄のために、一体どのような労働市場が存在し、どういう労働力配給機構が成立していたであろうか。

一般にアンテイ・ベラムを通じて黒人の自然増殖率は、旧南部に於ては、そこでの農業の需要をみたしてなお余りあるものであったが、南西部では増大する棉花生産に対する需要を充すに足りないのが実状であった。しかるに次表は十九世紀前半期を通じての棉花生産諸州と境界諸州における黒人人口の増加率について、全く逆の数字を示しているのである。

一七九〇年―一八六〇年に於ける棉作諸州及び境界諸州における黒人人口増加率の比較[20]（%）

年度	棉作諸州(A)	境界諸州(B)
一八〇〇	四七・四	二四・四
一八一〇	六一・三	二三・四
一八二〇	四八・〇	一五・五
一八三〇	四六・八	一四・〇
一八四〇	三七・六	四・五
一八五〇	三五・六	一一・〇
一八六〇	二九・〇	七・一

(A)ノース・カロライナ、サウス・カロライナ、ジョージア、フロリダ、アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、テキサス、アーカンソーおよびテネシーの一〇州を含む。

(B)デラウェア、メリー・ランド、コロンビア地区、ヴァージニア、ウェスト・ヴァージニア及びミズーリの六州一区を含む。

このことは何を意味するか。とりも直さず大量の奴隷労働者が境界諸州から西南部の棉花生産諸州へ流動した事実を示す。さらに次表はその移動人口の流れの大きさとその方向を一層明確にしている。

一八二〇年―一八六〇年、奴隷販売州における輸出奴隷人口[21]

年度	輸出奴隷人口	奴隷販売州	奴隷購入州
一八二〇―三〇	一二四、〇〇〇	ヴァージニア、メリーランド デラウエア、※ノース・カロライナ ケンタッキー コロンビア地区	サウス・カロライナ、ジョージア アラバマ、ミシシッピー ※テネシー、※ミズーリ
一八三〇―四〇	二六五、〇〇〇	〃	〃
一八四〇―五〇	一四六、〇〇〇	〃	〃
一八五〇―六〇	二〇七、〇〇〇	〃	さらにテキサスを加える。

（但し※印のテネシー、ミズーリ、ノース・カロライナの諸州は同質的な奴隷市場でなく、ある地域では輸入が行われる一方他の地域では輸出が行われていたので、その輸出入の数量も不安定であった。）

又Slave Trading in the old South の著者F・バンクロフトはかかる奴隷の移動について「五〇年代には大西洋岸諸州や境界諸州から西南部へ移動した奴隷の優に七割が、買いとられるかまたは販売目的でつれさられた。[22]」と述べており、このことは右の人口移動の大半が奴隷取引によって行われたことを明らかにしている。しかもこの種の奴隷取引は決してただ慢然と行われたものでなく、とりわけ旧南部や境界諸州に於て、或程度専業化されつつ、かなり組織的におこなわれたものであることを次表は教えるであろう。

年令別奴隷人口（百分比）[23]

年令別	一八六〇年			一八五〇年		
	総計	奴隷販売州	奴隷購買州	総計	奴隷販売州	奴隷購買州
一五才以下	四四・八	四五・六	四三・八	四四・九	四五・六	四四・三
一五―一九	一一・四	一一・五	一一・四	一一・一	一一・三	一一・〇
二〇―二九	一七・六	一六・五	一八・九	一八・〇	一七・〇	一八・九
三〇―三九	一一・七	一〇・七	一一・八	一一・三	一〇・五	一二・一
四〇―四九	三六・四	三四・四	三八・一	三六・四	三四・六	三八・一
五〇才以上	七・五	八・五	六・七	七・五	八・五	六・六

（但し、奴隷販売州としては、ヴァージニア、メリーランド、デラウェア、サウス・カロライナ、ミズーリ、ケンタッキー、およびコロンビア地区、奴隷購買州としてはジョージア、アラバマ、ミシシッピー、フロリダ、テキサス、およびルイジアナが含まれる。）

すなわちこれによると一八五〇年及び一八六〇年現在にかける奴隷販売州の年令構成は、購買州のそれに比べて何れも十五才以下の年令層がより高い比率を示しているのに対し、二十才以上――四十九才の労働年令層の比率は逆に低くなっており、この不均衡は少くとも奴隷販売州を奴隷購買州のための労働力培養の場として特徴ずけているものと見てよいであろう。かくてアンティ・ベラムに成立した奴隷配給機構は旧南部と境界諸州において奴隷を生産し、ミシシッピーやRed River 流域一帯の高度な棉作地帯へ之を輸送するという特殊地域的分業機構であり、かかる組織的な配給機構に支えられて南部奴隷制農業はその繁栄への道を約束されていたのであった。

七

アンティ・ベラム奴隷制プランテイションに関する収益性の解明には、なお関説すべき多くの問題が残されているであろう。例えば奴隷制と単一栽培の問題、奴隷制と地味の枯渇化の問題、奴隷労働力の能率に関する論議、奴隷制と農業改革の問題、プランテイション経営と北部および外国商人との関係の問題、等々。しかしこれらについては最後に挙げたものを除いては、わが国でも既にある程度周知の問題でもあり、ここでは割愛することにした。

さて私の結論は、利潤算定の基礎に関する若干の仮定の下においてではあるが、センサス其の他の数字的実証を基礎として、㈠アンティ・ベラム奴隷制プランテイションの収益性につき之を全体として否認する積極的要因は特に認められないこと、㈡一八六〇年という時点においてさえ奴隷制度の自滅を必然ならしめたような経済的要因の表面化は少くとも認め難いこと、これである。しかしこのような結論によってわたくしは、奴隷制経営の収益性を、アメリカ奴隷制存続のための必要にして充分なる保障としてもち出そうとしているわけではないことを断っておかねばならぬ。ただこれによって、これまで奴隷制自滅の必至を唱えて来た論者たちが、もはや奴隷制経営における非採算性をその論拠とするわけにはいかないということを強調しておきたいだけである。経済的にすでに駄目になっていたが故に本来消え去るべき運命にあった奴隷制をまもるために、南部人が不必要な戦争に追いこまれたとする見解は全く事実に対抗しえない仮説にすぎないと考えるからである。

註① L・M・ハッカー著、中屋・三浦氏共訳、資本主義の勝利（下）一五六―一五六頁

② Quoted in "Was Plantation Slavery Profitable?" by Thomas P. Govan, Journal of Southern His'ory, VⅢ, 1942, pp. 520—1

③ T, P. Govan. op. cit., pp. 519—24

④ Ibid., pp.514—17

⑤ Ibid., P. 517

⑥ Ibid., P. 517

⑦ Kenne:h M. Stampp, The Peculiar Institution, Slavery in the Ante-Bellum South, N. Y., 1956, P. 411

⑧ Govan, op, cit., P. 516

⑨ Afred H. Conrad and John R. Meyer, The Econonics of Slavery in the Ante-Bellum South, The Journal of Political Economy, Vol. LXVI, No. 2, 1958.

⑩ U. P. Phillips, The Economic Cost of Slaveholding in the Cotton Belt, Political Science Quarterly, Vol. XX., No. 2, pp. 268

⑪ Ibid., pp. 271～2

⑫ Ibid., p. 266

⑬ Conrad and Meyer, op. cit., p. 117

⑭ Ibid., p. 116

⑮ Stampp, op. cit., p. 417

⑯ Conrad and Meyer, op. cit., p. 119

⑰ Govan, op. cip., p. 517

⑱ Ibid., p. 518

⑲ Herbert Weaver, Mississippi Farmers, 1850～1860, 1945, p. 117

⑳ Conrad and Meyer, op. cit., p. 113

㉑ Ibid.

㉒ Frederic Bancroft, Slave Trading in the old South, 1931, p. 398

㉓ Conrad, op. cit., p. 114

On Profitability of the Plantation Slavery in the Ante-Bellum South

Tetsuro HATTORI

Some southern historians such as U. B. Phillips, C. W. Ramsdell argue that plantation slavery had reached its natural limits in the Ante-Bellum and that even without external intervention, it would have destroyed itself. Because it was inefficient, cumbersome and unprofitable.

On the other hand, some students like Lewis Gray, Kenneth Stampp, Thomas Govan and Alfred Conrad have strongly contested this kind of view, contending that southern slave plantation was at least remunerative and profitable. With reference to the views of the latter scholars', I have analyzed some economic aspects of plantation

slavery and brought it to light in this paper that slavery was rather profitable to the south and that there was nothing necessarily self destructive about the profits of the slave economy.